

らんびき
蘭引にのこる錬金術の香り

大阪市立科学館の3階に、「蘭引」という名前の器具がひっそりと展示されています(図1)。これは酒、薬、あるいは香水などをつくる蒸留器具です。この展示品は、江戸時代後半の民家で使われていたものです。

「蘭引」は聞きなれない響きで、漢字からどんなものかも想像できません。実はこれは当て字です。江戸時代にオランダから輸入されたガラス製の蒸留器具「アランビック」のオランダ語が、日本で訛って「らんびき」となったそうです。この蘭引=アランビックをさらにさかのぼると、錬金術の歴史に行きつきます。



図1 蘭引。大阪市立科学館所蔵

錬金術とアランビック

錬金術とは、鉄や鉛などの卑金属を、もっとも美しい金に変える作業、あるいは「飲めば不老不死となる薬」を作り出す作業のことです。現在では、怪しい商法でお金を稼ぐことを「錬金術」と呼ぶように、この言葉にはかなりネガティブなイメージがあります。しかし、18世紀くらいまではこの錬金術が正当な学問でした。古代ギリシャ、ローマ帝国、イスラム帝国、そして西ヨーロッパ社会と連なる学問の流れで、知識が受け継がれ、研究されていきました。この中で、硝酸などの酸、そしてアルカリ、アルコール、水銀、アンチモン、ヒ素などなど、さまざまな化学的知識が発見されていきます。現在の化学は錬金術から生まれたのでした。

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、すべてのものは「火」「土」「水」「空気」の4つの成分が、「熱さ」「冷たさ」「乾燥」「湿潤」の4つの性質のバランスで混じり合っていていいのではないかと考えました。現在の原子論の先駆けといわれる考えです。ここから、「加熱したり、冷ましたりなどの実験で、物質の性質をさまざまにコントロールできるはずだ」と当時の知識人たちは考えたのです。

そのような錬金術の実験において、中心的な役割を担ったのが蒸留器具「アランビック」でした。お手持ちのスマホで「蒸留器」と入力すると、変換候補にはミステリアスな絵文字が出てきます(図2)。これがアランビックです。いったいなぜこんな絵文字が登録されているか経緯は謎です。

アランビックという語は、古代ギリシャでビーカーをあらわす語「アンビクス」からきています。7世紀ごろアラビアがローマ帝国の学術都市アレクサンド



図2 アランビックの絵文字。

リアを支配し、錬金術の知識を手に入れたときに、アラビア語の冠詞「アル」がついて、「アランビック」となりました。「アルカリ」「アルコール」「アルゴリズム(計算)」「アルタイル(わし座の星)」、そして「アルケミー(錬金術)」でさえも同じくアラビア語に由来します。当時のアラビアは化学にかぎらず数学、天文学などの世界一の科学都市でした。人類の科学は、アラビア世界で大きく発展したのです。

錬金術の全体像を理解するのは困難です。というのも、錬金術の知識はみだりに広めてはならず、研究する能力と覚悟のある者にのみ伝えるべきと考えられていました。本に記録するときにも、さまざまなシンボルを用いたイラストと謎めいた文章が用いられました。誰もが読めば同じように理解でき、同じ実験ができるという客観性や再現性、公開性という性質が、錬金術にはありませんでした。ここが現代の科学ともっとも異なる点です。これにより、錬金術がミステリアスで、神秘的で魅力的、見方によれば、うさん臭い存在となったのです。

作品の中の錬金術

錬金術のモチーフは、現代でもさまざまな作品にあらわれます。たとえば、『ハリー・ポッター』シリーズ。「賢者の石」とは、「金にもなり、不老不死の薬にもなる、錬金術の最終目標」です。それは「水銀」と「硫黄」からなる「赤く輝く石」とされました。それは現在の化学的知識でいうところの硫化水銀 HgS 、辰砂という鉱石です。もちろん、辰砂は金にはならず、飲んで薬どころか猛毒です。ただし錬金術師のいう「水銀」「硫黄」は、現在のそれらとは異なり、もっと広い意味の性質を指していました。

2001年から2010年まで連載されたマンガ『鋼の錬金術師』は、実際の錬金術の歴史や伝説にかなり取材していることがわかります。謎の重要人物「ホーエンハイム」とは、16世紀に実在した伝説の錬金術師パラケルススの本名です。東洋人があやつる「練丹術」は、実際の中国で研究されていた錬金術の呼び方です。錬金術の高度な使い手「イシュヴァールの民」とは、おそらくアラビアの民族がモデルでしょう。

上羽 貴大(科学館学芸員)